

平成27年度 第2回江戸川区総合教育会議議事録

- 1 開催日時 平成27年12月10日(木)午前10時
- 2 場 所 第一委員会室
- 3 出席者 江戸川区長 多田 正見
江戸川区教育委員会
教育長 白井 正三郎
教育長職務代理者 石井 正治
教育委員 上野 操
教育委員 松原 秀成
教育委員 尾上 郁子
- 4 執行部 江戸川区副区長 原野 哲也
経営企画部長 山本 敏彦
経営企画部企画課長 千葉 孝
教育委員会事務局
教育推進課長 柴田 靖弘
学務課長 住田 雅一
指導室長 稲垣 達也
学校施設担当課長 佐藤 弥栄
統括指導主事 中山 兼一

開会時刻 午前 10 時

多田区長

おはようございます。

前回はいろいろご議論いただきまして、ありがとうございます。これからの予定ですが、年度内に大綱を仕上げたいと思っております。これは今のところの予定ですので、変更になる可能性もあります。

今回と次回は、自由な議論をいただいて、後の 2 回はまとめに入りたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

前回の議事録をつくりまして、委員会の皆様にお配りさせていただきました。話題としては、教育の不易流行というようなことだとか、少子高齢化の中での地域力、教育施設の有効活用、そういったことがありました。それから地域に開かれた学校実践、温故知新というような共育協働の実践をどうするか、切磋琢磨するという、向上心を持った形をどう展開するかということですね。それから、道徳教育とか、修身という問題など、いろんな角度からご意見をいただいたと思います。今日も引き続いて、幅広いお話をいただければと思います。

教育といえば、実際に現場としては、学校がまずあります。それから家庭教育、地域教育ということもあるので、この三つがどうしっかり教えるかということだと思えます。

教育を支えるということからすれば、国がどういう制度を構築して、どういう枠組みをつくるかということも重要な問題です。それを達成するためには、どういう財政支援とか、環境整備があるかということもあります。地方も当然同様な役割を負っていますので、努力しなければいけない。地方は実践の場としてふさわしいことをやるということに当然なると思えます。

学校を中心として、教育の場ということで考えれば、家庭教育も地域教育

も同等に重みがありますが、やっぱり地域全体の環境がどうあるのかということが、教育の結果を左右する。地域の教育力というのは、非常に大きなものを占めている。その中に学校、家庭も入ってきて、大きく言えばそういうことだと思います。

小さく見ていくと、学校という一つの単位をとって見ると、学校が先生を中心に教育をしてくださる。そこには保護者もいる。それから、地域もある。私は、この基盤を一つのコミュニティだとすれば、学校を単位として、いわゆる教育コミュニティと位置付けることができるのではないかと考えています。

学校には学校の教育の役割があって、家庭には家庭の役割があり、地域にも役割がありますが、それぞれ個々ばらばらではいい教育にはならない。それぞれの教育力をどういうふうに総合力として、子どもたちに教育的な影響を与え得るかということが、必要になってくるだろうと思います。

今私たちが教育コミュニティとして実感できるもの。例えば開かれた学校だとか、地域とともに歩む学校だとか、それはいいコミュニティをつくっていく上で非常に有効だと思います。例えば学校の中ですすくすくスクールをやるとか、中学生であれば、地域に出て行って、職場体験してくるということも、地域と密着した一つの教育活動です。こういう新しいタイプのコミュニティを高める状況がいろいろ生まれてきていると思います。

そのほかにもいろいろあると思いますが、周年行事などを見ていると、地域と保護者と学校が一体になって、学校に深くかかわってきて学校を支えてきた人たちが、地域の学校であることを再確認していくというようなことは、非常に意義のあることだと思います。一つの学校コミュニティの姿を見ているような気がするんですね。

そんな概念を持っていていいんじゃないかと思います。委員さん方の、いろいろな思いを聞かせていただければと思います。よろしく願いいたします。

す。

松原委員

おはようございます。よろしく申し上げます。

今の区長さんのお話の中で、周年行事というお話をなさいました。本区のコミュニティと考えますと、学校があり、10年の節目のときに、子どもたちと教職員、地域、そしてPTAも含めて、過去を振り返るというので、周年行事では素晴らしい学習が行われております。

これを、10年で終わるのではなくて、日ごろの教育活動のそれぞれの立場で、学校でいえば校長を中心に継続してほしいと思います。

多田区長

典型的な事例として、上小岩小学校でやってきた菊まつりがあります。30年間続けてきて、毎年繰り返して菊を全学年が育てている。そこにボランティアの皆さんがたくさんいてくださるわけですね。

菊まつりというのは、学校ぐるみで、地域ぐるみで毎年菊が咲くときにあわせてやる。ああいう活動というのは本当に地域と学校が一体なんですね。まさに、コミュニティというか、非常に素晴らしい取り組みだなと思います。それは一つの例ですけれど、類したことはいろいろあると思います。

尾上委員

周年行事では学校、家庭、地域のつながりというのを、私たちも本当に素晴らしいなという思いで、拝見させていただいております。

また、それに限らず、地域の方々の力をかしていただいて、子どもたちの教育に携わってくださっているということは、本当に素晴らしいことだなと思います。

学校と家庭、地域が一つのコミュニティと捉えたときに、やはり学校と家庭というのは、常に対等であると思うんですね。また、学校と地域というのもあると思います。家庭と地域という部分が少し薄くなっているのではないかなと私は感じています。

子どもたちは、3分の1くらいが学校にいる時間で、そのほかは地域であり家庭にいる時間ということになります。子どものよりよい成長ということを考えていくと、地域の役割も大切と思われれます。

上野委員

コミュニティというと、普通その地域社会の文化的、歴史的な伝統・遺産というものを共有する地域共同体を意味するのだらうと思います。そして、それが学校という地域の教育機関として、そこに活動している教育者、家庭で我が子を監護・教育している保護者、そしてそれを取り巻く地域社会の関係者、それを総体的に見守り支援していく教育行政が一体となっていく関係が、教育コミュニティだと思います。

具体的に申しますと、まず家庭は教育の原点だと思います。それはどういうことかということ、父母その他家族の中で、原初的な人間愛というものを皮膚感覚で味合うことができるからであると思います。そして、そういう子どもたちが次第に成長して、学校に集まって、その人間愛の共通性を認識するという、そこが小・中学校で一番大切なことだと思います。そして併せて基礎学力を身につけながら、生徒同士のかかわり合いの中で、人格を形成していくという場、それが学校社会だと思います。

そしてさらに、それを取り巻く地域社会の人々とのかかわり合いの中から規範意識というものに目覚めていくのだらうと思います。ですから、そういう意味では、まさに家庭、学校、地域社会、そしてそれを見守り支援、指導をしていく地方教育行政があり、こういうものの相互的協力関係から教育コ

コミュニティ社会が形成されていくというふうに理解しているわけです。

多田区長

家庭と地域がもっと密接にかかわりあっていったほうがいいということは、もうそのとおり、今、上野先生がおっしゃってくださったこととつながっているわけです。

戦後から時代が相当変わっていますので、近隣でどう支え合うかということとは、大いに変わっている。都会というのは、余り個人的にかかわりたくないとか、そういう風潮もありますよね。プライバシーも大切なことだと思いますが、余りそれを地域のつながりという観点から考えると、行き過ぎるといろいろな問題もあるわけで、かかわりを強めていくということを考えなきゃいけないという思いも強くなっていると思います。

そういうことは非常に子どもの教育に影響するわけですよ。だから、子どもたちや地域を意識できないといけない。

石井教育長職務代理者

皆さん、おはようございます。まず周年行事のことなんですが、すごいなと思いますのは、子どもたち皆、区歌の時にすごく声が出るんですよ。歌を歌うということを福岡伸一さんは動的平衡という本の中で、体のいろんなパーツの躍動感というのが総合的にあらわされたものと捉えられています。総合的にあらわされた個をハーモニアスに表現するという意味合いで、合唱ではお互いがお互いを意識することが大事になります。お互いがお互いを意識するということがずっと発展していくと、歌の輪ができて、帰属意識を持つということにつながっていくように思います。

コミュニティをどういうふうにしたらよくできるかといいますと、一言で言うと帰属意識を高めるということに尽きると思います。それを学校に当て

はめていけば、先生の立場でいけば、この学校で教えていてよかった。子どもたちにすれば、この学校に行きたい。保護者にすれば、この学校でよかった。地域の方にすれば、この学校を支えていてよかった、支えがいがある学校だ、というようなことになろうかと思えます。学校に帰属意識を集中し、それをどういうふうに高めていくかというようなところを工夫するというのが、学校のコミュニティをよくする一つのキーワードになろうかなと思えます。

帰属意識を高めるといいましても、簡単には高まらないわけでありまして、ではどうすればいいかということ、誰もが得をする仕組みというのが必要かなと思うんですね。得をするっていいますと、経済的にお金というように考えがちなんですが、教育はお金の部分ではなかなか計ることはできません。とすると、心の問題になろうかなと思えます。言ってみれば心のWINWINシチュエーションというのをどれだけ醸成できるか、作り出すことができるかということがポイントかなと思えます。

多田区長

江戸川区で区歌が盛んに歌われるようになったのは、前の中里区長の功績が大きいと思えます。前の区長は昭和39年に区長になりましたけれども、区歌と江戸川区の紋章を全国募集してつくったわけです。それ以来、いろんな機会に区歌を歌ってくださいということで、推奨したわけですね。皆さんも本当に区歌をいろいろ歌ってくれたと思えます。

300幾つの、全国から応募があった中の一つですからね。なかなかいい歌詞だと私は思います。いつの時代にも通用して、古くならない歌ですね。20年位前に確かTBSで隠れたご当地ソングというのを全国で4つ紹介したんです。よく歌われる歌、地域の歌です。それで、江戸川区が紹介されました。

それくらい歌ってくださるんです。今度のオリンピックの4番も、皆さんが本当に親しんでくださっている現状があるから、800を超える応募があり、審査が大変だったのです。

つい1カ月くらい前ですか、テレビ朝日で23区の中に区歌のない区があるということの特集していました。その時に五つか六つの区歌が紹介されておりましたが、江戸川区の区歌は誰でも歌える区歌ですね。江戸川区は幸いにしていい区歌をつくっていただいたなと思っております。

尾上委員

私が一番感じるのは、成人式等で皆さんがお集まりのときに、久しぶりに歌われるのでしょうか、声を出して歌われています。区歌が心に染みついているんだろうと、すばらしいことだなと感じています。

心を育てることが一般教育にとっては大事なことで、これは学校の教育だけではできないことだと思います。

多田区長

石井先生のおっしゃった帰属意識によって、地域の心をしっかりと身につけてということだと思います。手法としては区歌もあれば、その他いろいろあると思うのですが。

上野委員

区歌にしても校歌にしても、大人になって社会に出たときに、自分の心のふるさとの歌として思い出せるような、そういうことが重要だと思います。私も周年行事に参加していますと、本当に江戸川区内の生徒さんたちは、大きな声ではっきり区歌を歌ってくれています。しかも、それが周年行事ですから、地域社会の学校を支えている方々が大勢いるところで歌う。まさにコ

コミュニティの教育力を感じます。

松原委員

学校現場サイドから見ると、子どもたちは学習状況とか、生活面で、それぞれ資質に差があります。そういうところで、私は校長として、先生方や生徒自身にもよくお話ししたのは、自分が行った先、出会った場、そこに帰属意識を持つといいですか、そういうことを子どもたちにも伝えていかないといけないということでした。

多田区長

学習意欲というのは勉強だけではないと思います。つまり、スポーツも文化もいろいろある。そういうものを学校だけで身につけさせるというのは、なかなか難しいと思います。東部地域祭で、あれは39回ですね。始まったときから読書感想文コンクールというのをやっておりますが、6,000以上の感想文が集まります。それは小学校、中学校ですけどね。何十点かの作品が文集になるので読むのですけれども、すばらしいなと思います。1年生から中学生まで、ある本を読んでそのことに対する感想を書いています。これは非常にすばらしいですよ。

石井教育長職務代理者

地域といいますと、PTAということがあろうかなと思います。私自身小学校、中学校でPTA会長をやっていた経験からお話を申し上げますと、いろんなことができる方というのは、いっぱいいらっしゃるんですよ。ですけども、忙しいですとか、PTAって敷居が高いというようなことで、なかなか出てきてくださらない。

そのとき、いろいろ工夫しましたのは、できる限り敷居を低くするような、

そんなようなことを考えてやっておりました。

一旦来てくださると、すごく充足感を持ってお帰りいただき、また来てくださるということにつながります。そういう意味では、開かれた環境というのをうまく醸し出していくことで、いつでも誰もが入ってこられるような状況にして、広く人材を求め続けるというようなことがあろうかと思えます。地域に対しても、多分同じような考えが当てはまるんじゃないかなと思っております。

上野委員

私は教育委員になってから特に心を痛めていることは、いじめ問題です。いじめを教育行政として、どうしたら防止できるか、あるいは解消できるか。

教育学者のマール・ボンズという人がいじめの定義とキーワードについて、次のようなことを言っています。

まずいじめというのは、人間関係の中で力の不均衡の存在から生まれてくる。そして、力の強い者は意図的にネガティブな行動を繰り返して行っている。そして、最も深刻なことは、その結果、被害者にとっては、極めて精神的にも肉体的にも深く強い苦痛である。けれども加害者のほうは、ほとんど何も感じていないという理不尽な特徴がある。したがって、いじめの関係は、被害者と加害者との間では絶対に解決できない問題だということです。当たり前のことのようにだけ、これを深く認識しなくてはいけないということです。そしてまた、いわゆる見て見ぬふりをする側、傍観者側からも、そのままでは何の解決もできない。

では、どうしたらいいのかというと、これは大人が積極的に行動を起こさなければだめだと。そのためには、特に大部分を占める生徒の傍観者と大人達のパイプをしっかりとつなぐという方法をいろいろ考えて、いじめの具体的な言動を、まず傍観者から聞く。そこから始めなければ、これは効果的な行

動とはならないとっております。

ですから、やはり大人達、教育者、保護者、地域社会の我々が意識改革をして積極的な介入者、行動者になるというところから出発しなければならないということになります。

日本のある教育者の統計では、何らかのいじめを受けたことがある子どもは57%いるんですね。その57%の中でも、自分もまたいじめたという子どもたちが36%いる。いじめたこともないし、いじめられたこともない子どもは37%くらい。この37%の一見いい子がやはり傍観者になっている。さらに、いじめを受けている子どもの中で、家庭で両親や保護者にいじめを打ち明けていない子どもが60%くらいだと。私はもっと多いのではないかと思うくらいですが。これを見ると非常に悲劇的な数字ですよ。

じゃあ、教師側についてはどうかというと、教師で積極的に真剣にいじめに向き合っている者は4、5%位だということです。逆に、結局は見て見ぬふりをする。あるいは傍観者的な立場に立たざるを得ないという教師が90%以上いる。私は信じられないんですけどもね。これはやはりいろいろな学校というものの組織、運営、人事関係というようなものにも関連していることだと思います。こういうことを見ますと、要は大人の意識改革、教育コミュニティでの大人の意識改革、ここから出発しないと、いじめは根本的に解決できないなと思っております。

多田区長

ありがとうございました。先生は弁護士でいらっしゃるから、いろいろな不条理の問題について、様々な役割を果たしてくださっているので、いじめの問題とか、体罰、パワハラ、セクハラなど、そういうことに深く関心を持ってくださってうれしいです。

松原委員

非常に厳しい課題ですよ。今、上野委員さんがおっしゃった大人の意識改革と全く同じで、子どもをめぐって誰が一番近場にいるかということ、やっぱり親であり、学校の先生だと思います。教員や家庭が、子どもの変化がわからないということは、私はないと思っているのです。そこにはやっぱり親御さんとのつながり、信頼関係を校長を中心に何とかつくっていかないと遅いんですよ。いじめの問題は待たなしです。現場の教員はそういうものを意識して、動かないとだめだと思っています。

多田区長

上野先生の話で、学校の先生でいじめに向き合う割合が4、5%という。

上野委員

統計ですけれども、はっきり言っていますね。真剣に積極的に立ち向かっている教師は。

松原委員

だとすれば、やっぱり教育委員会としてきちんと指導していかなければいけないと思います。

上野委員

これは教職員を責めているのではなくて、そういう現状、その背景を、しっかり理解していなくてはならないということですよ。

尾上委員

今のいじめというのは、命にかかわるようなケースが多くあります。物を

大切にするというのも、心を大切にするというのも、大人側の失われている部分が、子どもの社会に反映されているのではないかと感じます。

大事なことは、大きくなる前にどう気づいていくかということだと思えます。初期の段階であれば、立ち直っていくし、変えていくことができるのではないかと思います。学校も、地域も、そしてなにより家庭です。この家庭の中で、子どもの居場所というものがあるかどうかによって、子どもは親に必ず何らかの発信をすすると思えます。

それに気づかないということ自体が私は問題だと思っています。それから、一番大切な、幼児期の家庭での生活の送り方が、学校に入ってから友達とのやりとりにしても、大きく関係してくると思えます。

ですから、幼児期における家庭での生活というのがすごく大事で、その辺をしっかりと親御さんに見ていってほしいなと思えます。

多田区長

最近、ネットいじめは見えないから、なかなか見つけれないという話もありますけれども、教育長、何かいじめのことですらありますか。

白井教育長

江戸川区ではいじめ対策の方針をつくってやっております。25年度の認知件数が多いのですが、450件くらいありました。26年度がちょうど半分くらいに減ってきているところでございます。

多田区長

中学校、小学校ではどうですか。

白井教育長

やはり中学校になるとかなり件数が増えてまいります。

石井教育長職務代理者

人間ですね、自分のやりたいことをやっているとき、つまり物事に集中しているときは、人のことなんか全然気にならないですよ。例えば、読書をしているときに、他の人が何かやっていたとしても全然気にならないというようなことはよくあるかと思います。そこが実は一番キーポイントかなと思っています。つまり、自分が集中できるものというのをうまく見つけさせることが大事なのです。人間、学問に向いている人もいれば、物をつくるということに向いている人もいます。美術、技術、音楽、いろんなことに向いている人がいます。

中学校までの教育というのは、どんなことをやるためにもすごく必要なことなのです。一方で、学問、学力だけを上げればいいというようなのは、全くの誤りだと思っています。きちんと集中できる物事を見つけていく、そういう努力をしていけば、誰もがきちんと物事に集中できるようなことになってくると思います。そうすると、実はいじめなんていうのは起きようもないと思っています。

そういうことが100%実現可能かどうかはわかりませんが、いじめをなくすというときに、いじめ自体をなくすというのはもちろん大事ですが、集中できることをつくり増やしていくことが、めぐりめぐっていじめをなくしていくことにつながるのではないかなと考えています。

上野委員

皆さん渥美清さん主演の柴又の寅さん、男はつらいよというシリーズ映画をご存じでしょう。あれは、山田洋次監督ですよ。四半世紀の間に48作続き、映画界の興行成績からいってもベストだったというんですよ。2年

ほど前、山田洋次さんが文化勲章を受章していますね。

山田監督いわく、柴又の寅さんという、フーテン、フーテンと言われればかにされ、笑われているけれども、実は誰にも持っていないすばらしい才能を持っているんです。それは何かというと、何か困った人がいて、寅さんが相談を受けると、すぐにその人が喜ぶような、その人のためになるようなことを、身を粉にして率先垂範する、そういう能力があるんですということを言っております。

山田洋次さんの人生観といいますか、世界観というものは、特に、現代社会で一番いけないのは、知識偏重だと。一見学歴があり知識があれば、そういう人が社会の中においてエリートになっていく。けれども幾ら知識があっても、根本的なことは、庶民と庶民との横の関係における素朴な人間関係から生まれる人情なんですね。学力、知識だけで世の中が支配されると縦社会の支配構造ができ上がってしまう。

山田洋次さんはそういう哲学があるんだと思いますですね。これは今日のコミュニティ社会の中での根本的な問題でもあると思いました。

多田区長

私も山田洋次さんの家族についてのある文章を読んだことがあります、家族というものは、人間社会のいろんな集団の中で全く選べない、誰と誰を家族にするかは選べない、与えられた条件の一つだということです。家族にとって、乗り越えなければいけない課題を持った条件というのはいろいろあるのだけど、そこから逃げるわけにはいかない。夫婦は離婚できても、親子のきずなは切れない。だから、やっぱりそういう家族というものの、一つの宿命的な条件をどう受け入れるかということが求められる。それはもう本当に家族の愛をどう育てるかということなんだということで、非常に難しい課題です。でも、絶対にそれを乗り越えなきゃいけない課題ですと、こういうこ

とを言っております。あの方のつくる映画には、そういうテーマが多いですね。

だから、義理人情とか今おっしゃったことは非常に教育の中では大切なことです。例えば山本周五郎だとか、藤沢周平だとか、ああいう本をたくさん読んでみると、義理人情というのは何だということがわかるし、人間愛とか、男の美学とか、女性の美学、そういう人生、人間の美学というのは、一体なんだろうなということもわかってくる。そういう作家はたくさんいます。それはいじめをなくす対症療法ではもちろんないのですが、意識改革とか、子どもの教育的な心の土壌をどう豊かにしていくかということで、いじめなくすということですよ。

思春期のころ、いろんな本や社会に接する心の問題の土壌は、まだまだ未熟ですよ。だんだんそういうものをたくさん摂取して、ある種の望ましい自我が、学歴でいうとちょうど大学生時代ですけれども、いろいろな蓄積を持ってくると、案外いじめはなくなるのではないですか。

石井教育長職務代理者

そうですね、ぐっと少なくはなりますね。

尾上委員

あと、私はやはり自己肯定感を高めるというのが大事な事だと思います。自身も大切であり、人も大切であるということですね。小さいときからのいろんなスキンシップがあるとは思いますが、自分が大切、周りが大切という自己肯定感を高められるような接し方、また教育をしていく必要があると思います。

多田区長

これはなかなか簡単に答えが出る問題でもないのですけれども。尾木ママさんと、それから教育代表の方と、それから大河内さんっていましたね。愛知県で中学生だった。あの大河内さんのお父さんと3人が1時間以上、テレビで討論をしていたのですけれども。全然結論なんて出てこないですね。それほどに難しいですね。

だから、ベースの教育をどうするかというのは、一番先に出てくる。学問といっても学科を勉強するだけでなく、最終的には人間教育です。小さいころからしつけだとか、社会のかかわりとかいろいろあって、そういう中で人間教育のベースをしっかりとやりながら、なおかつ対症的なことにも取り組んでいかなくてはならない。重要な課題ですね。

上野委員

皆さんよくご承知の新渡戸稲造という人ですが、アメリカに留学して勉強していたとき、あるベルギーの法学者から日本では宗教教育というものがあるのか、あるいは聖書みたいな教典があるのか、というようなことを質問された。新渡戸さんはそういうものはないと言ったところ、宗教教育がなくしてどういう道德教育をしているのかと驚いたというのです。

新渡戸さんは、これでは本当の日本は理解されない。日本にはそういう文献化はされているものはないけども、それ以上に倫理、道德というものが存在しているということを感じていたので、それを英語で著したのが、例の武士道という本ですね。

武士道というと、その名前だけでは一見誤解されますが、結局は日本の伝統的な精神文化で普遍化しているもの、それを突き詰めていきますと、惻隱という言葉に行きつく。要するに惻隱とは、相手の立場に立ってものを考えるという、思いやりの情感ですね。

逆に言うと、それに反する卑怯な行為は絶対に許しちゃいかんという、考

えがある。だからいじめについて言えば、力関係で大勢の人間が一人の人間をいじめるということは、最も惻隱の情に反する卑怯な行いなんだと。卑怯は許せないということですね。そして誰かが卑怯なことをされていたら、身を挺しても、それをやめさせるという、そういう正義感と勇気が必要だということをおっしゃいます。

道徳教育とか家庭教育とか、コミュニティ社会において大切なことは、惻隱の情の勧めと、卑怯な行為を懲らしめるということに尽きるんじゃないかなと思います。

松原委員

そうですね。道徳は全ての教育活動の中でやるという、実際にこれを行ったらいけないんだということを、いろいろな活動の中で取り上げていくことです。授業の中での一コマでは、道徳的な活動というか、意味だとか、そういったものを子どもたちと一緒に教師も考えていく。こうだという結論を押しつけるのではなくて、いわゆるオープンエンドで終わるということです。それを実践するのは、教育活動全てですから、教師自身が子どもの変化だとか暴言だとか、ちょっとしたいじめだとか、そういうものに気がつく感性を磨かなきゃいけない。

多田区長

今の教育というのは、かなり対症的な教育に近いのですが、もっとそれ以前の、例えば心の温まるような話を先生が読むとか。それから伝記を読んで、そういう人たちの気持ちを理解するとか。そういうものがたくさんあったほうがいいですね。肥やしをたくさんつくっておかないと、そういうことも十分やってもらいたいなと思います。

尾上委員

道徳というのはまさに心の教育だと思っています。価値観の押しつけでは決してありません。ですから、教師の方々がどう取り組むか難しいこともあるとは思いますが。こう生きなさいということではなくて、人間としてどういうふうに生きていくのか。道徳の時間というのは、対話の時間であってほしいし、教材があるわけですから、その教材を介して、他者との対話であり、そしてそこから自己との対話になってくる。どう生きていくかという、そういう心の教育を私はぜひしていただきたいなと願っています。

石井教育長職務代理者

中学までの事柄というのが、その先のすごく不思議な世界を垣間見る、そのためにも絶対に必要な事柄ですので、基礎的な学力というのは、きちんと持っておくということが肝要だと思います。

多田区長

小学校のころは腕力の強い子がやっぱり人気がありますね。それから、中学では学力のある人間、成績のいい子を一応は尊重するという形になる。高校のときには、もう完全に人格本位になってきます。やっぱり高校くらいになると人間が見えてきます。大学に行ってもそういうことが、やっぱりあると思うのですが。

石井教育長職務代理者

そのとおりです。社会に出てもまた同様です。

多田区長

だから、学校の成績がよかったから、いい社会人になれるということには

ならないという、そういう定義もあるわけです。でも、もちろん学校も大事ですよ。

白井教育長

今日は大分お話がいろいろ出たようでございますので。

多田区長

ありがとうございました。また、次回よろしく願いたします。

閉会時刻 午前 11 時 25 分